

Essay

思い出の場所

福田 勝子 Katsuko Fukuda
福岡市西区

市民の憩いの場所、大濠公園は四季の花が植えられて見事に咲き早朝時々近所の老人会のお年寄り達がきれいに掃除されて、通る度頭が下がります。水辺にはアヒルさんのボートが浮かんでおりお店やレストランもあり人工の小川では子供達が水遊びをして何時も人々が賑わっており休日にはトランペットや三味線の音が聞こえ思わず足を止めてしまいます。

昔少女の頃は質素なボートが浮かんでおり何もなかった時代でした。落ち葉が落ちてても可憐な年頃でよく笑ったのを覚えています。

女は男より三歩下がって歩くのが常識と教えられた思春期の頃です。近所の知人の家に地方から学生の彼が下宿をして、よく勉強を教えてもらい弟しかいない彼は妹の様に可愛がってくれ、私は姉妹だけなので兄の様に慕っていましたが、やがて彼は卒業して地方に帰って行きました。就職した彼が博多に来るとの事で大濠公園で待ち合わせ久し振りに見る彼は、背広姿で格好良く新鮮な感じで嬉しく胸が一杯になりました。

ボートに乗り色々な会話をし乍ら一生懸命ボートを漕いでくれ、楽しい一日を過ごしました。

それぞれの道を歩きやがて私も就職して社会人として新しい一歩を踏み出した頃突然彼の弟さんが私の家に訪ねて来られて、兄が胃痛で他界したと報告されショックで涙が枯れる程泣きました。私には内緒にしてくれとの事で墓参りも行かれず悲しい思いを忘れることは出来ません。時々ベンチに腰かけて水面を見ているとボートの上の姿を思い出して彼をしのんでいます。

世の中には色々な人生があり憩いを求めて人々は集まり楽しい一日を過ごし家路に帰って行きます。

大濠公園は永久に博多の名所であり景観の場所だと思っています。



大濠公園にこめられたせつなさを、テーマに沿って淡々と書き込んだこの作品は、福岡が人生の中継都市である現実をも浮き彫りにした。「かたち」の景観価値を記述する作品が数多く見られるなか、「情」の景観は新鮮、心震える余韻を感じさせてくれた。(審査委員 落合 太郎)



志賀島

中島 利帆子 Rihoko Nakashima
福岡市東区

幼い頃家族旅行で海水浴に出掛けたとき、山育ちの私は、波の音がこわくて夜なかなか寝つけなかった。そんな話をしたら彼は笑って「おれは反対。たまに海から離れたところに行くとな潮の気配が感じられなくて不安になる」と言った。潮の気配？

彼の家は志賀島の浜から歩いて三分のところにあった。鳥居をくぐると、海と共に生きる人達の暮らしが静かに営まれていた。薄暗くひんやりとした土間ばりの商店。玄関の前に置かれたまだウニのかかっている、濡れた網と白い長靴。太陽の光を浴びてきらきらと白く輝く干物用のイカ。すれ違うのに肩が触れそうほど細い路地。その角にある小さな鮮魚店。捕れたばかりの無造作に置かれた魚を野良猫が狙っている。

そこにある全てのものが潮の気配に包まれていた。時間が切りとられたように静かな世界。ずっと昔からこの場にあり続ける光景。

「こんないい所で育ったんだね」。彼の少し照れたような笑顔を見ながら、私は今日見たものをずっと忘れることはないだろうと思った。

あれから十二年。福岡沖地震で受けた被害は大きい。けれど島の一日は今日も始まる。私達は二才になる娘を連れ、志賀島へ向かう。夏はもうすぐそこまで来ている。

福岡での志賀島は地理的・地形的に優れて特徴のある存在だが、島にまつわる自らの体験が、「潮の気配」の情景として見事に描かれ、思い出の質の深さと尊さが伝わってくる。語り言葉の自然さが、全体のいかにも静かで滑らかな表現に、巧みなアクセントを与えている。(審査委員 森岡 侑士)

思い出の場所 伝えたい景観

種子島 彩 Aya Tanegashima
福岡県小郡市

高校生の頃から福岡の街に憧れてきました。福岡の街のほどよい都会感とお洒落な雰囲気が好きだったのです。毎日行けたらどんなにいいだろう、と福岡とは反対方向にある高校へ向かう駅のホームで福岡へ向かう人達を羨望の眼差しで見つめていました。

二年前の春、念願かなって福岡の大学へと進学した私は、西鉄福岡駅から大学までの通学に迷わず自転車を選びました。憧れのこの街を、たくさん体で感じたいという思いからのことでした。

そして、初めて自転車で福岡の街を走った日に、私の一番のお気に入りの場所となる赤坂のけやき通りに私は出会ったのです。まっすぐにのびた、ちょびり広めの道の両脇にけやきの大木が並んでいて、まるで緑のトンネルの様だと思いました。大学に初めて通学したあたたかな春の日に、爽やかな風を体いっぱい感じて、けやきのトンネルを走り抜けた時の気持ちの良さは、今でも忘れられません。これからの大学生活は、きっと素晴らしいものになると思わずにはいられませんでした。

あれから二年。今までにけやき通りを何度通ったでしょうか。サークルの飲み会の後、酔っ払ってみんなで全力疾走したこと、彼氏の自転車に乗せてもらったこと、台風の日目の前でけやきが倒れてしまったこと。どれもけやき通りでの大切な思い出です。

けやき通りは、初めて通った時の希望に満ち溢れた気持ちを思い出せる場所であり、私の大学生活が詰まった場所でもあります。大学生活は早くも半分以上が過ぎ去り、秋からは就職活動を控えています。自分の進む道が開けるのかとても不安ですが、進むべき道に迷った時には、初めて通った時のあの気持ちを思い出しに、またここへ来ようと思っています。



大学入学時の希望に満ちたフレッシュな気分と新緑のケヤキとが重なって、初々しい心象風景が伝わってくる。そして筆者は、自分の進むべき道の選択に迫られている。その道が、ケヤキ通りのように魅力的で人々に喜びを与えられるようなものとなることを願う。(審査委員 菊地 成朋)



博多湾のカタチ

高木 正三郎 Shouzaburo Takagi
福岡市南区

逆方向に乗っている時にはあまりそんな気は起こらないが、羽田発の飛行機が福岡に近づくと、いつも眼下の風景を見たくなる。機内から見える博多湾のカタチが、なぜか「確かに我が家に帰ってきた」という不思議な安堵感を伴うのである。子供の頃から、地理の教科書で見てきた博多湾のカタチが現実のものとして目前に拡がる瞬間であり、これが「自分の住む場所カチ」なのだと思える瞬間でもある。

空からの博多湾は、東京湾の大きさを脳裏に留めるならば、湾というより入り江である。その入り江に寄り添うように、皆が都市の営みを繰り広げている。海の中道～志賀島は、そういう都市の営みを抱きかかえるために大地から伸びた右腕のように見えてくる。肩には立花山を抱え、裾野の県道35号線はかつての政庁、太宰府へと通じている。優美な弧を描く外腕は玄界灘を望む外海、お世辞にもエメラルドグリーンとは言えないが、それでも僅かに緑のかかった青い遠浅の海、そして白砂の砂浜であることを発見する。我が街には、近代都市としての機能を満たしていながら、こんな美しい海辺とも同居しているのだ、と自慢したくなる。西戸崎と線一本でつながった志賀島は、さしずめ細みの手首に力強い拳といったところか。札幌、仙台、東京、名古屋、大阪に至り、これほど特異な地形を持ち合わせている都市は思いあたらない。当たり前だと思こんでいたこのカタチは、空の旅行者にとって博多の地を印象深く焼き付ける「発見的風景」でもある。

既に進行中の地球温暖化を考えると、もしや志賀島が腕から切り離され孤島となりはしまいか、博多湾という入り江が消え失せてしまうのではないかと案じてしまう。昔から変わらぬこの湾のカチ、思い出の場所とはなっていないものではないか。あわただしく空を移動する時代の「日常景観」だといっている。

特別な場合を除き旅の最終目的地は我が家である。作者は自分の視点を空の旅行者と言っているが、その想いは地上の帰るべき自然の腕に抱かれた博多のまち。我が住処への想いであろう。それは板付に帰ってくる人々の共通の想いであろう。(審査委員 岡本 均)

Essay

第9回 福岡市景観エッセー